

症例報告

義足を使用して社会生活を送っている女性の体験に関する症例報告

重松 奈津子¹⁾, 梅野 薫¹⁾, 林 愛恵¹⁾, 飯藤 大和²⁾, 小谷 和男³⁾,
谷岡 哲也²⁾, Rozzano Locsin²⁾

¹⁾徳島大学医学部保健学科看護学専攻

²⁾同 大学院医歯薬学研究部

³⁾株式会社小谷義肢

(平成29年5月29日受付) (平成29年6月12日受理)

装具が高度化している時代において、義足歩行の獲得といった機能的側面だけではなく、当事者にとって義足が生活の質(QOL)にどのように影響を与えているのかを理解することが重要である。今回われわれは下肢切断後に社会復帰し、義足を20年以上使用してきた50代女性に対して、義足と共に生活をしてきた体験に関するインタビューを行った。その結果、癌による下肢切断という人生における大きな出来事に対する悲嘆よりも、化学療法の副作用がいかに苦しい体験かが明らかになり、義足装着時の痛みも体験していた。また、周囲からの視線を気にするよりも転倒しないように歩くことに注意を払っていた。当事者が治療と向き合い、リハビリテーションに取り組んでいる中で、人として成長するとともに、それを支える家族もともに成長していると考えられた。

はじめに

わが国の身体障害者数は平成23年には約386.4万人であり、増加傾向にある¹⁾。事故や疾患により身体の一部を失った場合、生活の質と地域での日常生活を維持する上で、義手や義足は有用である²⁾。義肢は失われた体の機能の一部を補い、本来の生活を取り戻すのに役立つ³⁾。下肢切断は、疾病によるものが増加しており、切断による機能障害により生活の質(QOL)は低下する⁴⁾。さらに歩行移動が制限された状態が続くと身体機能が衰え、死亡率の増加の一因となる⁵⁾。前述した状況において、当事者にとって義足がQOLにどのような影響を与えているのかを、当事者の体験から考察することが重要である。

本研究は、義足と共に生活してきた人が、義足をどのように捉え、生活の質にどのように影響しているかを明

らかにすることで、対象者の体験をより深く理解することを目的とした。

方 法

1. 症例

本研究における対象者は50代女性であり、約20年前に左大腿骨悪性腫瘍のため、大腿骨の3分の2を切断した。その後、事務職として社会復帰している。現在は、マイクロナンボコンピュータ制御型膝関節の義足を使用中である。義足により、身の回りのことや自動車の運転を自立して自分で行っている。家族構成は夫と息子の3人暮らしである。

2. 研究方法

プライバシーが守れる個室で60分間、対象者に対して、半構造的面接法によりインタビューを行った。

3. 調査内容

インタビューガイドを用いて、現在までの生活の経験について面接した。内容は「切断に至ったきっかけ」、「義足を使用して生活の質が変化したと感じる場面」、「義足を使用することについて周囲はどのように思っていると感じるか」などであった。

なお、本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認(承認番号2616号)を得て行い、雑誌発表について本人の同意を得た。

4. データ分析の方法

看護者として対象者を理解するために、哲学者のMayeroff⁶⁾、看護の理論家のCarper⁷⁾、Locsin⁸⁾のケアリング理論をもとに、「個人的理解」「経験科学的理解」「倫理的な理解」「審美的理解」の4つの観点からデータを分析した。

結 果

前述した4つの観点から分類した結果を表に示す。

個人的理解：「子どもが小さかったため、受診するのが遅くなった（3男が1歳6ヵ月であった）」

経験科学的理解：「転倒せず歩くことに集中しているため、人の目を気にしている余裕はない」「抗がん剤の治療を受けたのが辛かったので、足を切断することは私にとってそれほど（ショック）ではなかった」「義足を使い始めたときは希望があった」「抗がん剤を開始したときは希望も何もなかった」「抗がん剤がとても辛く、

全部で4クルールの切断後の化学療法を半分でやめた。死ぬような思いをした」

倫理的理解：「義足は自分の脚ではなく、盲導犬のハーネスと同じようなもの。義足を付けている間は常に意識しているのでくつろげない。ソケットの中のシリコンカバーだけであっても、つけている間は気が休まらない」「切断面はいつも傷だらけになる」

審美的理解：「子どもが小さい時に脚を切断したため、息子3人は自然に私に手を貸すことができる」「息子と比較して、夫は切断前と接し方が全然変わらないため、かえってありがたい」

表. 対象者の発言内容

<p>【個人的理解】 「最初の膝下の腫瘍は良性だったが、再発した腫瘍は膝上まで進行し悪性となっていた」 「入院したとき、同じ病気で入院していた方が腰の骨まで転移して切除していたのを見て、私もそうなるのではないかと希望が持てなかった」 「子どもが小さかったため、受診するのが遅くなった（3男が1歳6ヵ月であった）」 「不運にも骨折した部位に骨髄腫が見つかった」 「化学療法の副作用が死ぬほど苦しくて、全部で4クルールある治療を2クルールでやめた」</p>
<p>【経験科学的理解】 「小さい石であっても、歩行の際に踏むと転倒する（膝折れ）」 「転倒せず歩くことに集中しているため、人の目を気にしている余裕はない」 「運動が好きだったため、走る運動ができなくて辛い」 「スリッパが履けないため、下足のまま選挙できる期日前投票に行っていたが、数年前から投票会場に下足のまま上げられるように敷物を敷いていただいた。少しずつ環境が整えられていると感じた」 「和式トイレでの排泄、膝を曲げて座ることなど、膝関節を過度に屈曲する動作ができない」 「靴の着脱が不便である」 「義肢装具士に会う時は、加齢で健側の脚力が衰えた場合の相談をする」 「患肢を支えることが困難になった際は、膝が曲がらないようなタイプのものや、その他のものに変えたりすべき相談をする」 「義足を使い始めたときは希望があった」 「切断したことはそんなにショックじゃなかったんですけど、その後ちょっと抗がん剤の治療を受けたのが辛かったので、足を切断することは私にとってそれほど（ショック）ではなかった」</p> <p>抗がん剤について 「抗がん剤を開始したときは希望も何もなかった」 「抗がん剤がとても辛く、全部で4クルールの切断後の化学療法を半分でやめた。死ぬような思いをした」 「(抗がん剤の副作用で) 水も飲めないほど衰弱し、胆液性の嘔吐を繰り返した」 「(抗がん剤の副作用で) 気分が上がったり、下がったりした」</p>
<p>【倫理的理解】 「最初の膝下の腫瘍は良性だったけれど、再発した腫瘍は膝上で悪性のため大腿部を切断した。悪性になるのはまれなことであると医師から言われた」 「義足は自分の足ではなく、盲導犬のハーネスと同じようなもの。義足を付けている間は常に意識しているのでくつろげない。ソケットの中のシリコンライナーのカバーだけであっても、つけている間は気が休まらない」 「ソケットが皮膚に当たるので長い距離を歩くと、痛くて切断面はいつも傷だらけになる」 「座ると義足がずれてとても痛い」</p>
<p>【審美的理解】 「もっと遠くまで歩きたい、階段も普通に昇りたい」 「子どもが小さい時に脚を切断したため、息子3人は自然に私に手を貸すことができる。(腕を貸してくれ、対象者の歩幅に合わせるため、(対象者は) 安定して歩くことができる)」 「息子と比較して、夫は切断前と接し方が全然変わらないため、かえってありがたい。特別扱いされなかったことが結果的に良かった」</p>

考 察

個人的理解では、約20年前の対象者は子ども達が幼く、家事や育児が多忙であり、病院を早期に受診できなかった。大島らが行った調査⁹⁾では、母親の保健行動の優先性について、自己の体調が悪い時でも「仕事や家事、子どものことを終えてから休養する」という回答が6割以上を占めていた。そのため自分の健康を後回しにしたと考えられた。

経験科学的理解では、他者の視線を気にして歩行する余裕はないと発言があった。平成25年国民生活基礎調査¹⁰⁾によると、介護が必要になった主な原因について、要支援者では「関節疾患」が20.7%と最も多く、次いで「高齢による衰弱」15.4%、「骨折・転倒」14.6%であった。転倒は現在の自立した社会生活活動を制限する。さらに、義肢からの感覚がうまく把握できず、転倒する可能性が高いため、「他者の視線を気にして歩行する余裕はない」という体験をしていた。

「抗がん剤がとても辛くて、全部で4クルールの切断後の化学療法を半分でやめた。死ぬような思いをした」という発言は、切断によって下肢を失うことに対する悲嘆よりも、化学療法の副作用がいかに苦しい体験かが明らかになった。久我らの調査¹¹⁾では乳癌の化学療法において身体的・精神的 QOL の低下から活動性の低下をもたらす一因として、化学療法の副作用を挙げていた。対象者は化学療法の先に「希望」を抱いていたものの、想像を絶する化学療法の過酷さに絶えきれず治療中断という決断に至ったと思われる。看護師は、化学療法の副作用の軽減に努め、化学療法中の体験の理解に努め、患者が治療を継続するために、体験理解をしながら支えていく必要があると考えられた。

倫理的な理解では、義足によって生活は改善したが、「義足は自分の脚ではなく、盲導犬のハーネスと同じようなもの。ソケットの中のシリコンライナーのカバーだけであってもつけている間は気が休まらない」という発言から、義足は自分の一部とは感じられず、“便利な道具”という捉え方をしていると考えられた。

「ソケットが皮膚に当たるので長い距離を歩くと、痛くて切断面はいつも傷だらけになる」と話し、義足装着による痛みを体験していた。

義足は切断により失った下肢機能の代用する一方で、転倒や不快感など¹²⁾を惹起していると考えられる。医療スタッフは義足の利便性だけでなく不都合や不便さの両側面の体験を理解する必要があると考えられた。

審美的理解では、「子どもが自然に手を貸してくれ、一方で夫は切断前と接し方が変わらないためかえってあ

りがたい」と感じていた。佐々木が行った調査¹³⁾では、下肢切断後の独立歩行可能群における歩行訓練の心理的動機について、『自分自身のために頑張った』と『家族（両親・妻・子どもを含む）のために頑張った』という回答が多く見られた。家族の存在が切断後の QOL や自立のための達成動機に影響していると考えられ、対象者が治療と向き合い、リハビリテーションに取り組んでいる中で、人として成長するとともに、それを支える家族とともに成長していると考えられた。

おわりに

切断によって下肢を失うことに対する悲嘆よりも、化学療法の副作用がいかに苦しい体験かが明らかになり、義足装着による痛みも体験していた。初期に抱いていた希望、不便と感じる場面、また痛みの感じ方は年齢変化と共に変化していた。対象者が治療と向き合い、リハビリテーションに取り組んでいる中で、人として成長するとともに、それを支える家族とともに成長していると考えられた。

謝 辞

本研究を行うにあたり、貴重な経験やお気持ちを聴かせていただきました対象者様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 内閣府 H26年版障害者白書第3章、障害者の状況（基本的統計より）<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h26hakusho/zenbun/pdf/s3.pdf>（平成29年3月16日参照）
- 2) 白木原憲明：単肢切断患者の QOL. 日本義肢装具学会誌, 20: 73-76, 2004
- 3) 福井信佳：能動義手の現状と課題. 日本産業・災害医学会会誌, 62(5): 298-303, 2014
- 4) 成田寛志, 野坂利也, 横串算敏, 佐古めぐみ 他：高齢下肢切断者の QOL 評価—SF36と義足使用質問による—。日本義肢装具学会誌, 20(2): 69-72, 2004
- 5) 河野あゆみ, 金川克子：地域障害老人における「閉じこもり」と「閉じこめられ」の1年後の身体・心理社会的変化. 日本老年看護学会誌, 5(1): 51-58, 2000
- 6) ミルトン・メイヤロフ：II ケアの主要要素. ケアの本質—生きることの意味—. 初版第22刷, ゆみる出版, 東京, 2014, pp. 33-66

- 7) Carper, B.: Fundamental patterns of knowing in nursing-Advances in Nursing Since, 1(1), 13-24, 1977
- 8) ロッツァーノ・C. ロクシン著, 谷岡哲也 他 (監訳) : 現代の看護におけるケアリングとしての技術力—実践のためのモデル—第8章看護実践のための人を理解する枠組み. 第3版, ふくろう出版, 岡山, 2016, pp. 123-135
- 9) 大島由美, 金山時恵: 乳幼児を持つ母親の健康意識と予防的保健行動. *International Nursing Care Research*, 10(4) : 35-44, 2011
- 10) 厚生労働省 平成25年国民生活基礎調査の概況 IV 介護の状況 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/05.pdf> (平成29年3月16日参照)
- 11) 久我貴之, 重田匡利, 須藤学拓, 山下晃正 他: 乳癌患者における化学療法が及ぼす QOL 評価. *日農医誌*, 54(4) : 655-660, 2005
- 12) 中村隆, 山崎伸也, 三田友紀: 下肢切断者の QOL 調査. *国立障害者リハビリテーションセンター研究紀要*, 34 : 11-18, 2013
- 13) 佐々木伸: 切断者の歩行獲得を規定する心理的要因. *PO アカデミージャーナル*, 1 : 89-97, 2005

The lived experience of a woman in her 50 s with a lower limb prosthetic device

Natsuko Shigematsu¹⁾, Kaoru Umeno¹⁾, Manae Hayashi¹⁾, Hirokazu Ito²⁾, Kazuo Odani³⁾, Tetsuya Tanioka²⁾, and Rozzano Locsin²⁾

¹⁾Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Tokushima University, Tokushima, Japan

²⁾Graduate School of Biomedical Sciences, Tokushima University, Tokushima, Japan

³⁾ODANI ARTIFICIAL LIMBS Co., Ltd.

SUMMARY

It is imperative that a concern of physical function is addressed such as ability to walk, and how the disease and the sophistication of artificial devices influence person's quality of life (QOL). A woman in her 50s who has a lower limb prosthetic device after amputation. She lived with this prosthesis for more than 20 years. Interviews were recorded, transcribed, and analyzed. The findings of the study revealed that hoping for a better QOL can be lost due to unbearable suffering from adverse reactions during chemotherapy. This lived experience made her decide to discontinue chemotherapy giving her greater than expected grief experience than her post-amputation. Watchful ambulation became distinctive and purposive with each step so as not to fall. This walking style was to show her normal gait, rather than worrying about the gaze from people. Furthermore, it was found that feelings of incompleteness still existed even with the prosthetic device. This was often attributed to the physical pain and discomfort while wearing this device even while knowing that she is now a whole person. Still she felt incomplete in the moment. Visible artificial device becoming her essential part, provided a meaningful life that enabled her to grow with the family.

Key words : lower limb amputation, ambulation, Lower limb prosthetic device, lived experience